

理解についての内在主義と外在主義
Internalism and Externalism about Understanding

谷川 綜太郎

Abstract

The internalism-externalism debate about knowledge is traditional in epistemology. There is a similar debate about understanding, although understanding tends to be considered an internalist notion. This paper clarifies internalist and externalist conceptions of understanding and reviews their disagreement. This disagreement lies in the necessity of meta-cognition, that is, whether it is possible to understand without understanding that one understands. From an externalist standpoint, Grimm argues that infants and animals without meta-cognitive abilities can understand. This paper also argues that Grimm's argument fails to account for the special value of understanding.

1 研究テーマ

本研究では、理解についての内在主義と外在主義、およびそれらの対立点を明らかにしたうえで、適切な解釈を検討する。

2 研究の背景・先行研究

近年、認識論では理解に対する関心が高まっている。その理由の一つは、理解の認識的な価値の高さにある。たとえば、ある定理を理解している状態は、単にその定理を知っている状態と比べて、認識的に価値が高いように思われる。もちろん、これは単なる直観であり、この直観を正当化するためには、理解のどの部分が知識にはない価値を生み出しているのかを具体的に特定する必要がある。この作業を行うためには、理解を厳密に定式化しておく必要があるものの、現状、その定式化に関しては内在主義と外在主義が対立している。本節では、この対立について概観する。

2.1 認識論における内在主義と外在主義

本題に入る前に、まずは認識論における内在主義と外在主義について簡単に説明しておきたい。多くの場合、これらは知識についての立場である。知識についての内在主義によると、何かを知っていると言うためには、それに関して真なる命題を信じていることに加えて、認識主体が反省のみによってその信念を認識的に正当化できる必要がある。たとえば、日本が議院内閣制を採用していることを知っていると言うためには、「日本は議院内閣制を採用している」という命題が実際に真であり、また、認識主体はその命題が真であると信じていることに加えて、反省のみによってその信念を認識的に正当

化できる（たとえば、教科書にそう書いてあったからだと主張できる）必要がある。

それに対して、知識についての外在主義によると、最後の条件は必要ない。たとえば、信頼性主義という外在主義の立場によると、知識とは信頼できるプロセス（すなわち、実際に真なる信念を産出する傾向のあるプロセス）により産出された真なる信念に他ならない。したがって、認識主体が反省のみによってその信念を認識的に正当化できるか否かは関係ない。たとえば、教科書を見るというプロセスが信頼できるプロセスであるとするなら、教科書を見ることにより形成された真なる信念はすべて知識である。もし仮に、認識主体がその信念をどのように形成したのかを忘れてしまっていたとしても（すなわち、反省のみによって認識的に正当化できなかつたとしても）、それが知識であることに変わりはない。

知識についての内在主義と外在主義の対立には、KK テーゼが関連すると考えられている。KK テーゼとは、「認識主体 S が命題 P を知っているなら、S は命題「S は P を知っている」も知っている」というテーゼである¹。一般に、内在主義ではこのテーゼを支持する傾向があり、外在主義では支持しない傾向がある。たとえば、(外在主義である) 信頼性主義では、あるひよこ鑑定士がひよこの性別を知っていると言えるのは、そのひよこ鑑定士が信頼できる仕方でひよこの性別に関して真なる信念を形成しているときであり、かつそのときに限る。この条件を満たすために、そのひよこ鑑定士が自分がひよこの性別を知っているという事実（すなわち、自分が信頼できる仕方でひよこの性別に関して真なる信念を形成しているという事実）を知っている必要はない。他方、内在主義では、そのひよこ鑑定士がひよこの性別を知っていると言えるのは、自分の信念を反省のみによって認識的に正当化できるときである。この条件を満たしているとき、そのひよこ鑑定士が自分がひよこの性別を知っているという事実（すなわち、自分がひよこの性別に関して認識的に正当化された真なる信念を持っているという事実）を知らないとは考えづらい。このように、知識についての内在主義では KK テーゼを支持することが自然であり、外在主義では支持しないことが自然である。したがって、本稿ではさしあたり、KK テーゼを支持する立場を知識についての内在主義、支持しない立場を知識についての外在主義だと考えることにする。

2.2 理解についての内在主義

以上のことを踏まえて、議論の焦点を理解に移したい。まずは理解の基本的な成立条件を明確にしておこう。たとえば、ピタゴラスの定理を理解していると言うためには何が必要だろうか。少なくとも、知識の場合と同様、定理

に関して真なる命題を信じている必要があるだろう。そこには、「直角三角形における斜辺の長さの平方は他2辺の長さの平方の和に等しい」という命題や、定理の証明に関する命題が含まれているかもしれない。そのうえで、理解していると言うためには、それらの命題を個別に信じているのではなく、何らかの仕方に関連付けて信じている必要があると言いたくなるかもしれない。認識論者たちも同様に考える傾向があり、たとえばクヴァンヴィグは次のように述べている。

理解は、巨大で包括的な情報の集合の中で、説明的な関係や、その他の整合性を生み出す諸関係をつかむこと (grasping) を要求する。関連付けられていない多くの情報の断片を知ることができるが、理解は当の主体によって個々の情報が繋ぎ合わせられたときにのみ達成される。 [3, p. 192]

なるほど、たとえばある地域の歴史を理解するためには、その地域の歴史に関して個々の事実を信じているだけでなく、それらの事実を整合的になるような仕方でも結び付けている必要がある。さしあたり、このような要素が理解を本質的に特徴付けていると考えることにしよう。すなわち、関連する情報の中で整合性を生み出すような諸関係を「つかんでいる」という要素が、理解を本質的に特徴付けていると考えることにしよう。

さて、(上記のクヴァンヴィグの見解にも見られるように、) 多くの認識論者は関連する情報を単に関連付けられるだけでなく、内在的に (すなわち、反省のみによって) 関連付けられる必要があると考えている。この考えに従うなら、たとえばピタゴラスの定理を理解していると言うためには、単に証明が定理を正当化するという関連付けを行えるだけでなく、反省のみによってそれを行える必要がある。この点に同意する立場を、理解についての内在主義と呼ぶ。

理解についての内在主義をさらに明確化するために、本稿ではさしあたり次のテーゼを支持する立場だと考えることにする。すなわち、「認識主体 S が対象 O (あるいは命題 P) を理解しているなら、S は命題「S は O (あるいは P) を理解している」も理解している」というテーゼ (すなわち、KK テーゼの理解版 = UU テーゼ) である。このテーゼが正しければ、たとえば自分がピタゴラスの定理を理解しているという事実 (すなわち、自分がピタゴラスの定理に関して真なる命題を信じており、かつそれらの命題がどのように繋がっているのかをつかんでいるという事実) を理解しないままピタゴラスの定理を理解することは不可能である。このことは、ザグゼブスキの以下の記述にも現れている。

理解は〔中略〕ある種の意識的な透明性 (transparency) によって構成されている状態である。自分が知っていることを知らずに知ることが可能かもしれないが、自分が理解していることを理解せずに理解することは不可能である。 [6, p. 246]

このように、理解についての内在主義者は UU テーゼに同意しつつ (すなわち、理解についての内在主義を支持しつつ)、KK テーゼに同意しない (すなわち、知識についての外在主義を支持する) ことで、理解と知識を区別する傾向がある。

2.3 理解についての外在主義

理解についての内在主義に対する主要な批判は、グリム [1] によって提出されている。グリムによると、メタ認知能力 (すなわち、自分の認知状態を認知する能力) を持たない乳児や動物などの存在者も十分に理解できることから、UU テーゼは誤りである。

グリムの議論を順に見ていこう。グリムによると、何かを理解していると言うためには、それに関して正確な「因果マップ (causal map)」を持っている必要がある [1, p. 214f.]. 正確な因果マップとは、実際に成立している因果関係や依存関係を正確に表現したものであり、ある人が正確な因果マップを持っているか否かは、その人が実際に正確な因果推論を行えるか否かに等しい。たとえば、ある議会の仕組みを理解していると言うためには、その議会の仕組みに関して正確な因果マップを持っている必要がある。この場合の正確な因果マップとは、その議会の仕組みを構成する様々な要素 (たとえば、法案の提出や委員会の設置など) の複雑な依存関係を正確に表現したものであり、ある人がそれを持っているか否かは、その人がその議会での手続きに関して実際に正確な因果推論 (たとえば、その議会において法律が成立するまでにどのような手続きが必要であるかについての推論) を行えるか否かに等しい。

ここで重要なことは、理解していると言うためには、実際に正確な因果推論を行えていれば十分であり、自分が正確な因果推論を行えているという事実を理解している必要はないということである。グリムがその根拠として挙げているのは、メタ認知能力を持たないが、実際に正確な因果推論を行える乳児や動物などの存在者に対して、十分に理解を帰属できるという直観である。グリムが挙げている事例の一つ見てみよう [1, p. 221]. ある実験では、生後数ヶ月の乳児に対して衝立の後ろからお手玉を投げ、衝立を取り払ったときに人がいる場合といない場合とで乳児の反応の違いを観察した。結果、人がいない場合にのみ、乳児は驚いたような反応を見せた (すなわち、衝立が

あった場所を有意に長い時間眺めていた)。実験者の分析によると、乳児は既に簡単な因果マップを形成しており、人の存在がお手玉の出現を引き起こすという簡単な因果推論を行っていたため、その予想が裏切られたことにより驚いたような反応を見せたのである。もちろん乳児は自分が理解していること(すなわち、実際に因果推論を行えていること)を理解していないだろうが、グリムはこのような事例を真正な理解の事例だと考えることで、UU テーゼを拒否し、理解についての外在主義的な定式化が可能だと結論している。

3 筆者の主張

最初に述べたように、理解が注目に値する理由は、理解には特別な価値(すなわち、知識にはない価値)があると考えられているからである。しかし、グリムによる定式化を採用した場合、理解にそのような価値があることをうまく説明できないだろう。

この点を説明するために、まずはグリムによる定式化を採用した場合に、理解の特別な価値をどのように説明できるのかという点を明らかにしておきたい。グリムは次のように述べている。

理解の特別な価値は、世界がどのように展開するのかを予測し、場合によっては制御することに対するわれわれの自然な関心に由来する。[1, p. 226.]

グリムによる定式化を採用した場合、理解している人は少なくとも実際に正確な因果推論を行える。グリムはその能力を用いることで、「様相空間や反事実的状况において物事がどうなっているのか」を「見通せる」と考えており[1, p. 225]、さらにその能力を用いることで、世界の展開を予測したり制御したりできると考えている。グリムによると、それが理解の特別な価値に他ならない。

しかし、世界の展開を予測したり制御したりできるということは、本当に理解の特別な価値だと言えるだろうか。この点は明らかではないと主張したい。なぜなら、そのような能力は知識の集積によって十分に獲得可能だと考えられるからである。なお、ここで想定している知識とは、事実についての知識(すなわち、knowing-that 型の知識)や方法についての知識(すなわち、knowing-how 型の知識)を含む、これまでに議論されてきた種類の知識である。たとえば、明日の天気を予測する能力は、今日から明日にかけての天気を理解するまでもなく、現在の天気の状態についての知識や、それに基づいて天気を予測する一般的な方法についての知識の集積によって十分に獲得可能だと考えられる。また、計算機を制御する能力は、計算機を理解するまで

もなく、計算機を制御する方法についての知識の集積によって十分に獲得可能だと考えられる。したがって、予測したり制御したりする能力が理解することによって獲得可能だとしても、そのような能力は（これまでに議論されてきた種類の）知識の集積によって十分に獲得可能だと考えられるため、それによって理解の特別な価値を説明することはできないと考えられる。このような理由から、グリムによる理解の定式化を採用する限り、理解の特別な価値は明らかではないと主張する。

以上のことを踏まえて、改めて理解の特別な価値は何かと考えるなら、それはやはり、情報がどのように関連しているのかを反省のみによって説明できることだと思われる。すなわち、天気を理解している人に価値があるのは、天気に関する様々な事実がどのように関連しているのかを反省のみによって説明できるからであり、計算機を理解している人に価値があるのは、計算機に関する様々な事実がどのように関連しているのかを反省のみによって説明できるからである。反対に、メタ認知能力を持たない乳児や動物がいくら因果推論を行えたとしても、そのような能力を持ち得ないことは明らかである。したがって、理解が本質的にそのような価値を持つと考えるなら、UU テーゼを適用することもまた妥当である。以上の理由から、本稿では理解についての内在主義を支持する。

4 今後の展望

理解の価値を他の観点から説明する試みもある。たとえば、クヴァンヴィグ [4] は理解が「好奇心 (curiosity)」を充足するという観点から、理解には「最終的な価値 (final value)」があると主張している。また、プリチャード [5] は理解が本質的に「認知的達成 (cognitive achievement)」を伴うという観点から、理解には最終的な価値があると主張している。これらの試みを検討することは今後の課題である。

注

¹KK テーゼはヒンティッカ [2] により定式化されている。

文献

- [1] Stephen R. Grimm. Understanding and transparency. In Stephen R. Grimm, Christoph Baumberger, and Sabine Ammon editors, *Explaining Understanding: New Perspectives From Epistemology and Philosophy of Science*, pages 212–229, Routledge, New York, 2017.

- [2] Jaakko Hintikka. *Knowledge and Belief: An Introduction to the Logic of the Two Notions*, Cornell University Press, Ithaca, 1962.
- [3] Jonathan L. Kvanvig. *The Value of Knowledge and the Pursuit of Understanding*, Cambridge University Press, New York, 2003.
- [4] Jonathan L. Kvanvig. Curiosity and the response-dependent special value of understanding. In Tim Henning and David P. Schweikard editors, *Knowledge, Virtue and Action: Putting Epistemic Virtues to Work*, pages 151–174, Routledge, New York, 2013.
- [5] Duncan Pritchard. Knowledge and understanding. In Duncan Pritchard, Alan Millar, and Adrian Haddock editors, *The Nature and Value of Knowledge: Three Investigations*, pages 1–88, Oxford University Press, New York, 2010.
- [6] Linda Zagzebski. Recovering understanding. In Matthias Steup editor, *Knowledge, Truth, and Duty: Essays on Epistemic Justification, Responsibility, and Virtue*, pages 235–252, Oxford University Press, New York, 2001.

(千葉大学)